



特集 新美南吉 生誕100年

わたしとことば
トツパ 李錦玉
悩み解決
言語活動と「読むこと」

教材研究
「単元を貫く言語活動」を設定した指導計画

書き
漢字学習に生きる
書写指導

光村図書の書籍

図書館が劇的に変わる



読書力アップ! 学校図書館のつくり方
赤木かん子 著/B5/128頁/定価2,520円



読書力アップ! 学校図書館のつかい方
赤木かん子 著/B5/128頁/定価2,520円



光村図書 小学校 国語教育相談室 通巻No.150 2013(平成25)年1月30日発行 定価126円(税込)
 発行人=常田 寛 発行所=光村図書出版株式会社 東京都品川区上大崎 2-19-9 〒141-8675 電話 03-3493-2111
<http://www.mitsumura-tosho.co.jp> E-mail:koho@mitsumura-tosho.co.jp
 印刷所=協和オフセット印刷株式会社 デザイン=mint grafix

個人情報の取り扱いに関しては、弊社「個人情報保護方針」に則り、適切な管理・保護に努めてまいります。詳しくは、光村図書ホームページ「光村チャンネル」をご覧ください。
<http://www.mitsumura-tosho.co.jp> 広報誌の配送停止をご希望の方は、光村図書広報部までご連絡ください。

わたしとことば トッパ ————— 李錦玉

特集 02 新美南吉 生誕100年

- 作家が語る 南吉作品の魅力
 どれほど優しく見えたとしても ————— 石井睦美
 悲しみの湧き水で洗われる世界 ————— 志茂田景樹
 人として忘れたくないもの ————— 那須田 淳
 新美南吉 人と作品—哀のある愛の世界— ————— 谷 悦子
 南吉に魅せられて
 新美南吉記念館へ行こう

その悩み、解決
します! 3 14 言語活動と「読むこと」 ————— 赤木雅宣・桂 聖

教材研究のススメ 5 18 「単元を貫く言語活動」を設定した指導計画 ————— 興水かおり

書写の時間を
考えよう 12 22 漢字学習に生きる書写指導 ————— 新しい指導を考える会

わたしの生地は大阪。生まれると同時に二つの言葉の海をただよっている。喃語(※1)は大阪言葉。それとも母語。当然記憶にあるはずもない。鮮明に記憶にきざまれているのは、音ではなく情景である。連子窓の格子を両の手でしっかりと握って、体を左右前後に動かすと、外の景色が揺れ動くのが、快く面白くていつまでも同じ動作をくりかえしていたのをおぼえている。何歳ぐらいだったろうか。二歳か三歳か——不思議な思い出である。その後わが家は大阪を後にする。初めて目にした母国は、ぼたん雪の降りしきる夜だった。その地での日常は当然母語なのだが、その当時のことは、さっぱりおぼえていない。でも「トッパ」という言葉は何十年たっても忘れなかった。忘れるどころか「トッパ」のことをますます知りたくなる。トッパは母方の親戚の男の子で三歳ぐらい上りしかかった。おんぶをもらったり手をつないでくれたり、ころんで大泣きしていると「ぼくの手は葉だ、ぼくの手は葉だ」と、痛いところに手をかざして呪文をと覚えてくれるやさしい存在であった。わたしは長い間この「トッパ」を名前だと思っていた。心の中で「トッパ」と親しみをこめて、その名を折にふれてそっと思いついていた。それは幼時の母国の思い出でもあった。

十数年前、思いがけないソウル行きの話がもち上がった。短い日程を割いて両親の故郷——木浦の南の海に浮かぶ珍島(チンド)をたずねた。タクシーを走らせて探しあてた母の実家に立ち寄って話した。農業を手びろく営んでいるようだった。父の家は絶えていた。後で戸籍を送ってほしいと頼んで、物足りない気持ちを残してそこを去った。

日本に帰って数日後、珍島から電話が来た。受話器をとると「クムオギかい」と低い男の声。「そうです」と反射的に答えながら、「あつトッパだ、トッパはオッパ(※2)だったんだ」と頭の中でひらめいてわたしは胸が熱くなった。



1929年、大阪生まれ。詩の創作、朝鮮の民話の再話や現代文学作品の翻訳等で活躍。みみずくの会、タバスコ(少年詩)、バオバブに所属。著書に『さんねん峠』『へらない稲たば』(ともに岩崎書店)、『いちど消えたものは』(てらいんく)などがある。小学校『国語』教科書(3年下)掲載作品「三年とうげ」作者。

※1 乳児の、まだ言葉にならない発声。
 ※2 女性や子どもが、年上の男性に親しみを込めて使う呼び名。



特集



新美南吉

生誕100年

今年の七月三十日、児童文学者・新美南吉の生誕100年を迎えます。この機に、その生涯と作品世界について特集いたします。三人の作家が語る作品の魅力、児童文学研究者による解説などを通し、彼の人となりや思想を、かい間見ることができればと思います。

作家が語る 南吉作品の魅力

どれほど優しく見えたとしても

作家 石井睦美

初めて触れた南吉の作品は『おじいさんのランプ』だった。

孤児の巳之助^{みけのすけ}少年が、町で「花のようにあかるいガラスのランプ」を目にする。巳之助の住む村ではまだランプを灯す家などなかったため、彼には初め、それがなんなのかわからない。それでも、暗い夜をあかすませるうつくしいものは、巳之助のこころを捉え、動かし、ついに彼はランプ屋として身をたてるに至った。時は流れ、町には電気がひかれた。早晩、それは村にもやってくることになる。受け入れがたい思いが巳之助^{みけのすけ}を苛む。けれど、時の流れを止めることができないことを一番知っているのは、ほかならぬ巳之助自身だ。なぜなら、電気はあの日の巳之助のランプそのものなのだから。

新しかったものはやがて古いものとなり、新しくきたものに、その位置を奪われる。滅びるもの、失われていくことへの痛みや悲しみが、優しい語り口に滲^じんでい

る。すべてのランプを灯して、木にぶら下げ、それに石を投げつけては壊していく。ひとつまたひとつとランプは壊れ、消えていく。三つ目のランプが消えてなくなるとき、巳之助はもうランプを壊すことができなかつた。巳之助の悔しさが伝わる。寂しさが染みる。

そんな巳之助にこころを寄せ、時代の流れを残酷なものに感じたのは、小学生のときのことだった。以来ずっと、それはわたしのなかにあり続けた。

おとなになって読み返したとき、巳之助がランプを壊したもうひとつの、いや、ほんとうの意味がわかったような気がした。巳之助にとつて、ランプはただの商売道具ではなかつた。それは、巳之助を経済的に助け、字を覚えさせ書物を読むことを教えた。つまり、孤児の少年巳之助の親代わりともいえるものだった。それはかけがえないものであり、失われてはならないものだ。

巳之助が、幼少のころ母親を亡くした南吉に重なる。死によって母親を奪われた南吉は、その不条理を受け入れてはいなかつたのだ。いちばん大事なものを他者によって奪われ失われるなら自分の手で、南吉はそう願わなかつたらうか。巳之助はそう願わなかつたらうか。ひよつとして『ごんぎつね』でごんを殺さなくてはならなかつたのも同じ理由かもしれない。

南吉の文体は優しく静かだ。でも、そのなかには狂気が潜んでいる。その狂気こそが、物語に命を与えているのだと思う。

いしい むつみ



一九五七年、神奈川県生まれ。出版社勤務を経て、執筆活動に入る。五月のはじめ、日曜日の朝で新美南吉児童文学賞などを受賞。著書に「すみれちゃん」シリーズ（信成社など）、光村図書小学校国語教科書編集委員。



悲しみの湧き水で洗われる世界

作家 志茂田景樹

別の町から越してきて中学に入った僕には友達がいなかった。そのことと、体が小さく虚弱だったこともあっていじめを受け、学校へ行くのが辛くなった。

ある日の昼休みに、いじめっ子達から避難したい気持ちから学校の図書室に入った。棚の本の背表紙を見て回ってすぐに、僕は「新美南吉」という著者名に関心をそそられた。

(新しく美しい)
とは何とない言葉だろう。いじめから逃れたいという思いが新しく美しい世界にいる自分をイメージさせたのかもしれない。

そうして抜き取った童話集で『ごん狐』をはじめとしていくつかの新美南吉作品と出会った。

どの作品も僕には悲しく切なく、とりわけ『ごん狐』の結末には涙を誘われた。

(何で撃っちゃうんだよう！)
心で叫んだが、それはけて兵十を咎め

たものではなかった。

悲しく切なくてもそのときの全作品が僕の心に美しく染み込んだ。それはどうしてだったろう。

高校に進学してまもなく新美南吉の作品を読み返したことがある。それまでに読んだ作品に限ったことで、作品の数にしても三十点に届かなかったと思う。

新美作品には『仔牛』『里の春、山の春』などのように、ほのぼのとして心が温かくなるような作品も多いのに、いやむしろ、そういう作品のほうが主流なのに、やはり、読後は悲しく切ないものが胸に染み込んでくる。それが新美南吉の作品の魅力であり、かつ秘密に僕には思えた。

高校から歩いて十五、六分のところに谷保天満宮があり、その頃、そこへ散策に行った。拝殿の横手のほうに湧き水の小池があって山葵が栽培されていた。水が湧いているところは水面がぼこぼこ盛り上がり

ていた。

そのさまを見ているうちに、新美南吉は湧き水のようにあふれる悲しみの物語を紡いでいたのではないかと、とはっと思った。その悲しみは新美南吉のとても深淵で純粋な人間性から湧き出ているもので、悲しく辛い気持ちで読んだ読者のその悲しみ辛ささえもきれいに洗い清める力を持っている。ずっと後年になって僕は読み聞かせ活動をはじめたが、自作の童話を読み聞かせるときも新美南吉の悲しみの力を借りている。



しもだ かげき
一九四〇年、静岡県生まれ。中央大学法学部卒業。一九七六年「やっこ探偵」で小説現代新人賞を受賞し、執筆活動を開始。一九八〇年、「黄色い牙」で直木賞受賞。「よい子に読み聞かせ隊」を結成し、全国各地で読み聞かせの活動を行っている。



人として忘れたくないもの——南吉の物語世界

作家 那須田 淳

ときとして思いがけないことがおきる。でも、そんなときこそ、僕は立ち止まり、もう一度自分のあしもとを見つめなおすよい機会なのかもしれない。

東日本大震災もそうだった。

僕は今、東京とドイツのベルリンに、年に半分ずつ暮らしているのだけれど、当時はベルリンにいて、入ってくるニュースに胸を痛めた。そして、すぐにドイツの友人たちと一緒に、被災地に向けて支援物資を送るとしたらなにがよいかと話し合ったものだ。その一つにランプはどうだろうか、電気も通らないところで使えるから役に立つのではないという意見があった。結局、被災地の受け入れが難しいとのことで送らなかったのだけれど、そのとき、僕は新美南吉の『おじいさんのランプ』を思い出さずにはいられたのである。

ランプ売りのおじいさんが、新しい電灯時代の到来で商売がうまくいかななくなったことを嘆き、村に電灯を引き込むことを決

めた区長さんを恨んで家に火をつけに行く。そこで、火打石を使うとするが、なかなか火がつかず、こんな古くせえものは、いざとなると間に合わないのだと悪態をつく。だがそのとき察するのだ、世の中が進んで、自分のランプこそ、その「古くせえ」ものになっていたことに。

今になって、ランプのほうがかえって便利なこともあると思うのは皮肉に感じるが、この物語の核心は、文明の発達や新しい時代への讚美ではもちろんない。

人というものは弱いものだ。うまくいかなかったときに人のせいにして、恨んだり妬んだりする。でも、そこで自分に負けてはだめだと南吉は、おじいさんの口を通して、孫に語りかけるのである。

後悔し、改める。これは、『花のき村と盗人たち』など他の南吉の物語にも通じる世界観である。

南吉の扱う物語の登場人物たちは、みなどこか問題があったり、頼りなかったりする。

る。そんな彼らはその弱みゆえに流されそうになるが、でも最後に踏みとどまり、前を向いて生きようとするのだ。

南吉の物語を読んで流す涙があたたかいのは、ああ、僕もこういうところがあるなあと思いつつ、主人公たちの改心といった生き方に救われ、どこかで癒されるからだろう。

過ちに気がついたら直す。それは人として忘れてはいけぬものに違いない。

災害やいじめ、不況にと揺れる今という時代だからこそ、もう一度、自分を見つめるためにも、ゆっくり南吉の物語と向き合ってみたいと思うこのころである。



なすだ じゅん
一九五九年、静岡県生まれ。早稲田大学卒業。一九九五年からドイツのベルリン市に在住。著書に、坪田謙治文学賞受賞作「ペーター」という名のオオカミ、小峰書店など、共訳書に「新訳 飛ぶ教室」(角川つばさ文庫)などがある。





1 南吉の生涯

新美南吉は、愛知県知多半島の東海岸にある半田町（現・半田市）で、大正二（一九一三）年七月三十日に、父・渡辺多蔵、母・りゑの次男として生まれた。本名は正八。父が好きだった講談師の柳川庄八に由来し、生後すぐに亡くなった兄の名を継いだ。四歳で母・りゑを失い、二年後に継母・志んが来て異母弟の益吉が生まれている。八歳の時、叔父（母の弟）が死去したため母方の新美家の養子となり、戸籍上



半田中学校時代の南吉

の魅力である。

昭和七年四月、東京外国語学校（現・東京外国語大学）英語部文科に入学。幼年童話を書き始め、北原白秋の勉強会に出席し、傾倒していたマンスフィールドの小説やミルンの童話の翻訳、評論「バイロンについて」の執筆などをしている。南吉がこの時期に出会った都会的・西洋的な文化は、後の創作活動の豊かな養分となった。結核の再発によって四年半の東京生活を終え、南吉は昭和十一年十一月に帰郷する。以後は半田で、美しい自然と素朴な人々に詩を見出しながら創作を続け、昭和十八年三月二十二日に、喉頭結核のため二十九歳七ヶ月の短い生涯を閉じた。

南吉の幼年童話は五十編ある。その内の約三十編は東京外国語学校四年生の昭和十年五月に書かれた。南吉が「いい兄さん」と慕っていた異聖歌（※）から、幼年童話集出版の話があったからだが、実現はしなかった。いずれも原稿用紙三枚ほどの短い話なのに、南吉が評論「童話に於ける物語性の喪失」（昭和十六年）で主張した物語性——「文体の簡潔、明快、生新さ、内容の面白さ」をもっている。人間と動物とのほのぼのとした交流を描く「こぞうさんのおきょう」「里の春、山の春」、アンデルセ

は新美正八となった。養家で血のつながらない祖母と二人きりで過ごした寂しい幼年期の体験は、最晩年の「小さい太郎の悲しみ」のモデルになっている。

昭和六年、県立半田中学校を卒業後、岡崎師範学校を受験したが体格検査で不合格となり、母校の半田第二尋常小学校の代用教員を勤める。十七歳の南吉は、この時「こん狐」を作り、子どもたちに実際に語って聞かせた。この年の一月に復刊した『赤い鳥』に、童話（鈴木三重吉選）と童謡（北原白秋選）を熱心に投稿し、「こん狐」は翌年の『赤い鳥』一月号に掲載されたのである。中学二年頃から創作を始めた南吉は、日記に「悲哀、即ち愛を含めるストーリーリイをかこう」と記しているが、初期の代表作「こん狐」には、この考えが反映している。「孤独な魂が愛を求めて奏でる哀切な響きの美しさ」とへいじらしく、優しく、ひたむきな「こん狐のキャラクター」とが、作品

ンを連想させる幻想的な「木の祭」「去年の木」、哲学的な「かけ」、意表をつく（反転する）結末が面白い「飴だま」「赤いろうそく」など、多様な世界が開花している。ナンセンスなおかしさがあり、幼い人の柔らかくみずみずしい心に届く優しさで語られていて、教材やストーリーテリングに向く作品が多い。

2 子どもを抱く哀しみ

幼年童話「でんでんむしのかなしみ」は、平成十年九月にインドで開催されたIBBY（国際児童図書評議会）世界大会でのビデオによる講演で、皇后美智子様が幼年期に心の支えになった話として言及され、



安城高等女学校教員時代の南吉

注目を浴びた（橋をかける「文藝春秋」）。人は誰でも悲しみをもっているのだから、自分で自分の悲しみに耐えないといけない」という南吉のメッセージは、子どもたちが生きることをつらく感じる時の心の支えとなる。南吉は、一貫してこのことを作品で書き続けた。

東京外国語学校卒業後、失恋・発病・失業という人生最悪の時期を経て、昭和十三年に県立安城高等女学校に就職。社会的・経済的にも健康面でも安定を得た南吉は、友人で満州にいた江口榛一から「哈爾濱日日新聞」という発表の場を与えられて、意欲的に創作を始める。昭和十四年から十六年にかけて、「久助君の話」「屁」「川」「嘘」などの子どもを主人公に内面を描く連作を発表。特に、学校ではおどけ者の兵太郎がとつくみあいの後で見せた寂しげな表情に驚き、久助が「一つの新しい悲しみ」を抱く「久助君の話」を重視していた。この作品で、南吉は、子どもの屈折した心（悲しみ・孤独・不安・懐疑・エゴ・劣等感など）に着眼し、新しい表現技法（子どもの内面を子ども自身に独白で語りせる手法）を試みて成功したからだ。（何ということか。いったい、これは誰だろう。なんだ、やはり兵太郎じゃないか。）とい



『赤い鳥』（昭和7年1月号）と、掲載された「こん狐」

※白秋のまな弟子で「たきび」を作った童謡詩人。南吉童話を世に出すことに尽力した人。

うように。昭和八年に書かれた評論「外から内へ」での主張（子どもの内側に入って子どもの五感で世界を捉えよう）を、実作として結実させたのである。

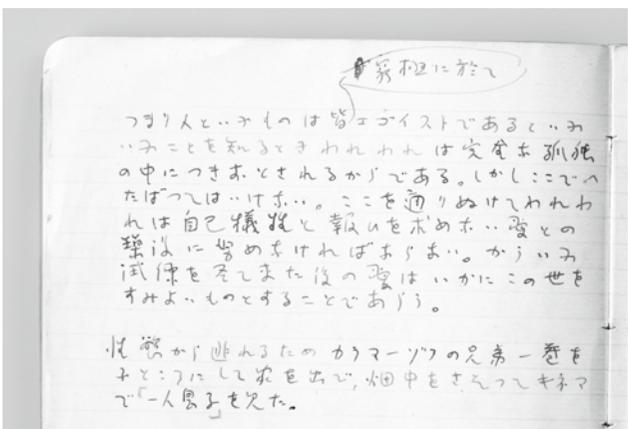
よく知っている人間の全く別の側面を見た五年生の久助君の驚き（悲しみ）について、大阪の小学六年生の子どもはアンケートで、「大人になる道を一歩進ました重大な発見だ」「私たちがやんでいることをといてくれる」と感想を書いていた。「久助君の話」は、子どもから大人への過渡期にある子どものアイデンティティ（自分が自分であること）を覚醒させる。

南吉は、安城高等女学校で、南吉の赴任とともに入学した十三歳の少女たち（十九回生）を卒業までの四年間担任し、熱心に日記指導をした。その中で、思春期の子どもたちが抱く悲しみ・喜び・悩み、物事に対する感じ方や考え方と実際に出会い、作品に反映させていった。

昭和十八年一月に、南吉はのどの痛みに耐えながら、再び子どもを主人公にした「小さい太郎の悲しみ」「疣」「狐」を書いた。この三作品は、それぞれ違った角度で、子どもが人間として成長していく過程で必要な人生上の認識が、完成度の高い洗練された文体によって造形されている。「小さい

が（世のため人のためになる生き方）を模索する主人公として描かれている。こういうテーマを描くためには、社会と時代に関わって生きてきた大人の主人公を必要としたわけだが、南吉の名を不朽のものとしたこれらの作品は、子どもたちに（人はいかに生きるべきか）を語っている。

なかでも「おじいさんのランプ」は、主題・構成・表現のいずれの点でも児童文学としての完成度が高く、深い美しさがある。



昭和12年3月1日付の日記



安城高等女学校で担任した19回生との写真(中央が南吉)

太郎の悲しみ」は（泣いても消すことのできない悲しみ）を、「疣」は笑いを織りこみながら（悲しみに耐える力）を描き、心の面で困難な時代を生きる子どもたちへの励ましとなっている。それに対し「狐」は、初期の「ごん狐」「手袋を買いに」と中期の久助君シリーズの融合形で、祭りの晩に新しい下駄をはいたために、友だちから狐が憑いたと疎外されて悲しむ文六を母親が

十三歳の少年で孤児の巳之助は、つねづね身を立てたいと思っていたが、（自分のための立身）が（人のため）にもなるように描かれている。最初のランプ屋では、「お金ももうかったが」自分の村の暗い家々に「文明開化の明るい火を一つ一つとしてゆく」のが喜びでもあったというように。そして「青やかな光」の「花のように明るいガラスのランプ」は、商品以上に美への憧れと文明の象徴であり「希望のランプ」として存在する。電気が登場すると、「世の中のためになる新しいしよばいにかわろうじゃないか」と、巳之助は本屋になる。電氣屋ではなく本屋になったのは、「字が読めないじゃ、まだほんとうの文明開化じゃねえ」という思いからであるが、物質文明以上に精神文明の大切さを主張しているところに、主題の深さがある。

この作品の美しさは、大野の町で初めて見た「出会いのランプの明るさ（希望）」が、電氣の登場によって暗く屈折（絶望）した後、半田池での光のフィナーレ「別れのランプの明るさ（煩悶をくぐりぬけた後の希望）」へと発展していくところから生まれてくる。巳之助の人間としての成長の過程が、明と暗の対照法で描かれているのだ。半田池のまわりの木につるしたなつかしい

無償の愛で包む物語である。南吉は創作活動の最後に、母という最も身近な大人の愛に守られた子どもの（寂しさ・悲しみ）を描き、安心感のある世界（子どもにとつて何が大切な）を提示した。「狐」はまさに（哀のある愛のストーリー）である。

3 無償の愛に生きる 大人の主人公

南吉は人生最悪の昭和十二年に、思想の根幹となる次のような認識に達した。

「人といふものは皆窮極に於てエゴイストであるといふことを知るときわれわれは完全な孤独の中につきおとされる」が、「ここでへたばつてはいけない。ここを通りぬけてわれわれは自己犠牲と報ひを求めない愛との築設に努めなければならぬ。かういふ試練を経て来た後の愛はいかにこの世をすまよいものとするのであらう」（日記 昭和十二年三月一日付）。

そして、病気が悪化して死を覚悟する昭和十七年四月と五月に、大人を主人公にした「おじいさんのランプ」「牛をつないだ椿の木」「鳥右衛門諸国をめぐる」など六編を集中的に書く。これらの作品は、（孤独を通りぬけて無償の愛を）という思想

ランプをパリーンと割った時、巳之助の目には涙がうかび、ランプへの愛は哀に変わる。人物の動きの中に自然描写を織りこみ視覚と聴覚を響きあわせて、詩的な「光の世界」を創り出している。

構成は、全体を現在↓過去↓現在という回帰型にすることで、孫の東一君が祖父の若かった時間を共に生き、がみがみ叱るだけの老人だと思っていた「おじいさんはえらかったんだ」と感動して認識を変え、本屋を営む自分の家の来歴を知るという巧妙なプロット（因果関係）になっている。それは作品を味わい深くしている。

* * *

南吉文学の背後には、静かで青い海に囲まれた柔らかな緑と光の豊かな知多半島が、南吉の精神風土となって広がっている。その基調には、のびやかな明るさ、清冽さ、透明感があるが、それは郷土の美しい自然から生み出されたものである。

たに えつこ

一九四四年、徳島県生まれ。大阪市内の公立小学校教諭、梅花女子大学教授などを経て、同大学名誉教授。著書に「新美南吉童話の研究」（くろしお出版）、「まど・みちお 詩と童話」（創元社）など、編書に「新美南吉詩集」（ハルキ文庫）などがある。

南吉に魅せられて



研ぎ澄まされた美しい文体で多くの物語を紡いできた新美南吉。その作品の世界は、今、さまざまな表現によって姿を現し、広がっています。それらのうち、ほんのいくつかをご紹介します。

人形劇

人形劇俳優 たいらじょう 「たいらじょう」

いたい。たぶん、原作者の新美南吉もそう願っているはず。だから、あえて描かずに、私の演技を通して想像してもらおうんです」と、彼は語ります。それぞれの想像力にゆだねるからこそ共感が生まれ、それが見る者の心を動かすのでしょうか。

人形は、きつねの頭と尾のみ。舞台には黒い平台が一つだけ。たいらじょう氏の創りあげた人形劇「ごんぎつね」は、余計なものを含めず、観客の想像力が入り込む余地を残した中で練り広げられます。「ごん」以外の人物については、彼自身が俳優として演じるのだといいます。「舞台の上には彼岸花もないし、川も流れていない。でも、そこに存在しないものを見ることができると、演劇のいちばんの魅力です。『彼岸花が赤いきれのように咲き続く』景色をお客さんに見せたいときに、それを絵で描いてしまったらそこまで。私は、受け取り手それぞれに、自分がいちばん美しいと思うその景色を想像してもら

作品「ごんぎつね」との出会い、小学校の教科書でした。読んで衝撃を受け、人形劇俳優として生きる中で、この作品は当然、演じるべきものであると思い続けてきたのだと思います。他の人たちの舞台を見るにつれ、「自分の思う『ごんぎつね』はこう。自分の思う『ごんぎつね』を作らなきゃ」という思いが高まり、創作に至ります。彼は続けます。「私の人形劇は、『見る文学・見る読書』だと思っています。五感を使い、どっぷりと作品に浸り、新美南吉の本を読み終えたときの幸福感・満足感を味わってもらいたい。たいら氏の人形劇を通し、南吉の思想や世界観にいつそう近づけることができるかもしれません。

演劇

劇団 オクムラ宅 「新美南吉の日記 1931-1935」

新美南吉自身の生き方を取り上げた演劇。南吉の残した日記や詩をもとに、彼の十八歳から二十二歳頃までの出来事が物語として描かれます。

脚本は、南吉の日記や詩の引用と、南吉の人物像を解説するような語りとで構成されます。脚本・演出家は奥村拓氏。彼によれば、本作品の劇作家として、「南吉を知

らない人には興味をもってもらう」「知っている人にはもっと興味をもってもらう」という二つの使命をもって作品作りに臨んだとのこと。

「南吉の作品が大好きで、演劇のモチーフに取り上げてみたいとずっと思っていました。あるとき、俳優向けのワークショップ用のテキスト探しをしていて、南吉の日記に出会い、これを題材に演劇を作ろうと思に至りました。僕の『新美南吉論』がダイレクトに伝わる脚本になっているはず」と語ります。奥村氏が捉え、魅了された南吉像に触れることができる作品といえるでしょう。

アニメーション

「おちいさんのランプ」

南吉にとって初めての児童書の表題作「おちいさんのランプ」が脚色・アニメー

ション化された作品です。文化庁の若手アニメーター育成プロジェクトとして制作されました。

作中では、「村人たちの生活を明るくしたい」という主人公・巳之助の真つすぐな心根と、変わりゆく時代が、温かく色彩豊かに描かれています。ランプと電気の光の、微妙な描き分けは、見る者の目を奪います。



©TELECOM ANIME
テレコム・アニメーションフィルム制作/
25分/税込み1,400円
※公式ウェブサイトにて販売。
<http://www.telecom-anime.com>



劇団 オクムラ宅

俳優・演出家の奥村拓が主宰する演劇ユニット。2010年4月に旗揚げ。同氏は、1980年、福井県生まれ。2012年10月、『まばたき』でAAF戯曲賞最終候補。

公式ウェブサイト:
<http://okumurataku.com>



人形劇俳優 たいらじょう

1981年、北海道生まれ。操演者自らも参加しながら進行する独自のスタイルで、全ての役柄を一人で演じ分けるとともに、脚本・演出・音楽・美術も手がける。子ども向けのオリジナル作品の厚生労働大臣表彰など受賞多数。

公式ウェブサイト:
<http://tairajo.com>

新美南吉記念館へ行こう



「新美南吉記念館」(愛知県半田市)では、新美南吉の生誕100年を記念して、さまざまなイベントが企画されています。この機会に足を運び、南吉が育った半田市の空気と風を感じてみてはいかがでしょうか。

展示リニューアル

芝生で覆われた波打つような屋根をもつ新美南吉記念館。南吉が生まれ育った愛知県半田市岩滑の田園風景と調和するよう、建物全体を地下に埋めるデザインとなっています。一九九四年六月の開館以来、多くの入館者が訪れる場所です。

同館では、先頃、二〇一三年の新美南吉生誕100年に先立って、大がかりな展示リニューアルを行いました。

南吉やその作品の理解、また、授業のための教材研究に資する展示も、これまで以上の充実ぶりを見せています。その主な内容をご紹介します。



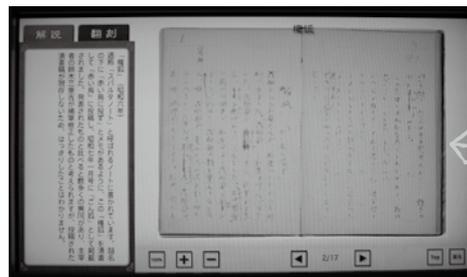
「手袋を買いに」の帽子屋

作中、子ぎつねが手袋を買い求めた帽子屋の正面部分が、原寸大で再現されている。隣に作りつけられた本屋の入り口は、図書室への入り口となっている。



「ごんぎつね」のはりきり網

展示室内には、兵十が魚を捕るときに使っていたはりきり網の実物が展示されている。写真やイラストでは分かりにくい、大きさや質感を確かめることができる。



「ごんぎつね」草稿

デジタル資料閲覧コーナーでは、南吉直筆の原稿や手紙などをスキャンした画像を閲覧することができる。ノートに書かれた「ごんぎつね」の草稿が、全ページにわたって閲覧可能となった。

100年記念イベント

新美南吉生誕100年を迎えるにあたって、同館が掲げたのは「初めての南吉、再び出逢う南吉」という言葉だといいます。子どもには、これを機に南吉の作品に巡り会ってほしい、大人にはもう一度接してみたいという願いが込められています。子どもの頃、だれもが一度は触れたこと

があるはずの南吉の世界ですが、時を経て、大人になってから再会すると、また違った印象や味わいを感じるはず。南吉の大切にしたこと、語りかける言葉が、違う響きをもって届いてくるかもしれません。生誕100年をきっかけに、子どもと大人に、南吉作品を間に置いて、語り合ってもらえたらという思いのもと、魅力的な展覧会やイベントがさまざまに企画されています。

2013年開催 新美南吉生誕100年記念イベント

新美南吉生誕100年没後70年記念 五木寛之講演会

3月24日(日) / 雁宿ホール(半田市福祉文化会館)
人間のエゴと美しい生き方を描く南吉文学を、作家・五木寛之氏が語る。

生誕100年記念特別展

7月13日(土)～10月27日(日) / 新美南吉記念館
南吉文学とふるさと知多半島との関わりを紹介。

【新美南吉生誕祭】※会場は雁宿ホール。

開幕式典・ことばの杜朗読会

7月27日(土)
元NHKアナウンサーと市内の小学生らによる南吉作品の朗読会。

生誕100年記念シンポジウム

8月3日(土)
南吉童話における、声に出し、耳から味わうことの大切さを考えるシンポジウム。

南吉の愛したクラシック音楽

8月4日(日)
名古屋フィルによる演奏と中京テレビアナウンサーによる南吉作品の朗読。

※この他にもたくさんのイベントが予定されています。

Q 南吉生誕100年 | 検索

新美南吉記念館

■所在地
〒475-0966 愛知県半田市岩滑西町1-10-1
TEL: 0569-26-4888
URL: <http://www.nankichi.gr.jp>
■開館時間
9:30～17:30
■休館日
毎週月曜日・毎月第2火曜日(祝日・振替休日)
のときは開館し、その翌日が休館となる)・年末年始
■観覧料
210円(中学生以下無料)
団体20名以上は各160円



言語活動と「読むこと」

日々、子どもたちを教える先生方が抱えるお悩みの中から一つを取り上げ、解決のためのアドバイスを掲載するコーナーです。
今回は、赤木雅宣先生と桂聖先生にご登場いただきます。

お悩み

言語活動を明確に位置つけた指導をしようとするけど、しっかり読むことができなくなってしまう気がします。どのように考え、何に気をつけて指導に臨めばよいのでしょうか。



言語活動をどのように捉えて指導をするかというのでしよう。

解決のために

1 「価値ある」言語活動を



ノートルダム清心女子大学 准教授
赤木雅宣

「言語活動を重視すると、読むことそのものがおろそかになる」「読んで、その後言語活動までしていると、授業時間が足りない」。こんな声を耳にすることがよくあります。

まず、確認しておきたいことがあります。言語活動を重視するとは、「授業の中で言語活動を展開すること」「言語活動を通して能力や態度を培う」ことの両方を、同時並行的に成立させ、目ざす能力を獲得させることです。言語活動を通して読むことの力をつけるのであり、力をつけておいてから言語活動に取り組むものではありません。そうなるべく、授業の中で展開される言語活動が本当に読むことの力をつける「価値ある」活動かどうかが問題となります。多様に想定される言語活動の中から、どの活動を選択するかという判断が大切だということです。それは、教材の特性、目の前の子どもの実態（経験値）、教師の願い（どんな力をつけたいか）などをもとにした、教

材研究で判断することになります。では、限られた授業時間の中でどう指導を充実させるかという問題です。PISA型読解力や学習指導要領の言語活動例などの影響もあり、いわゆる第三次以降の学習に、表現・交流などを中心とした言語活動を設定する実践が多くなっています。第三次以降を充実させようとするべく、どうしても時間不足の問題が生じます。

「お手紙」を主教材とした単元作りを例に考えてみましょう。ある先生は、「お手紙」はシリーズの一作品であるという特性から、第三次で「ふたりは いつも」「ふたりは いっしょ」など、同じ人物が登場する作品を多読するという言語活動を構想しました。登場人物の言動を通して性格を読み取ること、シリーズ作品の案しみ方を経験させることを重視したのです。

別の先生は、「お手紙」には会話文が多いという特性を生かし、第三次に

音読会を構想しました。そうすると、第二次で場面の様子や人物の行動を読み取るとき、会話文の言い方を話題にすることが多くなります。実際に音読してみる機会も増えるでしょう。

どちらの単元作りも、教材の特性をうまく捉え、価値ある言語活動を組み入れていきます。つけるべき力も考えた単元構想です。では仮に、多読、音読会の両方を組み込もうとするとどうでしょう。読むことのねらいが不鮮明になり、時間数不足も心配されます。一つの単元で多くのことをねらいすぎないようにし、教材研究で何を主たるねらいにするのかを絞り込んでいく必要があります。そこで扱わなかった（扱えなかった）内容・つけたい力などは、年間を見通した計画のもと、他の単元で扱い、身につけさせていければいいのですから。

赤木雅宣

一九五九年、岡山県生まれ。岡山県内の公立小学校、岡山大学教育学部附属小学校教諭を経て、現職。共著書に、『小学の授業づくりハンドブック 第2巻』（淡水社、『子どもと創る国語科基礎 基本の授業 小学校3年生』（国土社）などがある。

実際の教材や指導の場面に当てはめると、どのようなポイントが考えられるでしょうか。



筑波大学附属小学校 教諭
桂 聖

解決のために

2 教科書教材で学んだ読み方を生かす

目的は、読む力をつけること

言語活動の重視が求められるなか、間違いなく言えるのは、「読むこと」の授業の目的は、読む力をつけることであるということ。言語活動を明確に位置づけても、読む力がつかないのは本末転倒です。

単元構成のポイント

では、読む力をつけるには、単元をどのように構成すればよいのでしょうか。ここで重要なのは、「読むこと」の言語活動を通して読み方を学び、その後、それを生かせるような構成を考

えるということです。つまり、次のように整理できるでしょう。

ここでは、教科書教材を共通教材、教科書外の教材を発展教材と呼ぶことにします。

- ▼第一次（導入）
 - ・ 言語活動の見通しをもつ。
 - ・ 共通教材の概要を捉える。
 - ・ 発展教材を並行して読む。
- ▼第二次（展開）
 - ・ 文章の内容を理解する。
 - ・ 読み方を学ぶ。
- ▼第三次（発展）
 - ・ 文章を選び表現活動をする（※）。
 - ・ 学んだ読み方を生かす。

※発展教材から選ぶ場合（後述の例1）、共通教材内から選ぶ場合（後述の例2）が考えられる。

言語活動については、その種類や子どもの実態によっては、第一次で明確な目的をもたせたほうがよい場合と、必ずしもそうでない場合があります。ここで、具体的に、説明文「かるた」と文学「たぬきの 糸車」の実践をご紹介します。

例1「かるた」（三年下）

単元の中心となる言語活動は、「要約して紹介すること」。

かた」、そしてその手順について明確に指導しました。

さらに第三次では、私が用意した四つの説明文から紹介したいものを選んで読み、読んでいない子のために要約して紹介する活動を設定しました。

例2「たぬきの 糸車」（二年下）

「好きなところを絵と文で紹介すること」を、単元の中心の言語活動としました。しかし、先述のように、これを第一次で一年生の子どもたちに伝えても、切実な見通しがあるはずがありません。第二次で、これに似た言語活動を繰り返したうえで、最後の時間に伝えれば、実感の伴った学習課題となります。子どもたちも、意欲をもって取り組むことができます。

第二次では、たぬきに対するおかみさんの捉え方の変化を読み取ります。例えば、第二場面では「なぜ」かわい

に変わったのか」と投げかけ、捉え方が変化するきっかけを読み取りました。その後、授業のまとめとして、おかみさん役ときこり役に分かれ、「おかみさんは、糸車を回すまねをするたぬきのことを、きこりにどんなふうに話したのか」という課題のもと、ペアで次のような対話活動をしました。

（きこり）
なぜ、あのいたずらたぬきがかわいいのじゃ？

（おかみさん）
あら、目玉をくるりくるりと回して、糸車を回すまねをするのが、とってもかわいいのよ。

第三次では、こうした第二次の学習を生かして、好きな場面を選び、おかみさんときこりの対話を想像し、場面を絵と文で表します。第二次で繰り返して学習しているので、スムーズに取り組むことができました。



桂 聖

一九六五年、山口県生まれ。山口県内の公立小学校、山口大学・広島大学・東京学芸大学の各附属小学校教諭を経て、現職。著書に「国語授業のニハール」。

「デザイン」東洋館出版社、フリーストックで読みを深める文学の授業（学事出版）などがある。光村図書小学校「国語」教科書編集委員。

5

「単元を貫く言語活動」を設定した指導計画



学習指導要領の完全実施以降、「言語活動」をテーマにした校内研究を行う学校が目立つようになりました。これは、総則に示された「各教科等の指導に当たっては、児童の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、(中略)言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、児童の言語活動を充実すること。」(傍線筆者) によるところが大きいと考えます。

このことは、全ての教科で求められています。例えば、算数では解法の論理的な説明、理科なら実験観察レポートの作成、社会では資料に基づく新聞作りなどといった言語活動を盛り込むことで、児童の思考力・判断力・表現力の育成を図ろうとするものです。

では、国語科ではどうでしょうか。「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」という言語活動は、国語科の指導内容そのものです。今までの指導をどう変えられ

ばよいのか、とまどっている先生方も多いと思います。国語科における「言語活動の充実」はどうあるべきでしょうか。

また、盛んに説かれている「単元を貫く言語活動」とは、具体的にどのような指導計画のつえに成り立つのでしょうか。

今回は、それらについて、定番の教材ともいわれる「ごんぎつね(四年下)」を取り上げ、具体的な指導計画を考えてみます。ある小学校の四年生を担任する三人(主任・中堅・新採を想定)の、学年会での話し合いの場面を想像してお読みください。

単元名と単元の目標・指導のねらい

中堅 次の国語の単元は「ごんぎつね」ですね。前に四年生を受けもったときには二か月かけてじっくり読み深めました。最後の場面では涙ぐむ子も……。

主任 そうね。それが単元の目標、指導のねらい。自分の感想を話し合うために読み深める……子どもたちにとっては話し合うという目的、つまりゴールのイメージを、単元を通してもち続けることができ、教師にとっては、指導事項の確実な習得に向けて、子どもの主体性を継続させながら授業ができるということね。

新採 これが、よく目にする「単元を貫く言語活動」ってことか。

主任 今までと何がどう変わるのかと思っていたけれど、要は、学びの主体性を促し、子どもたちが自ら進んで楽しく学ぶための活動の提示と考えればいいのね。

中堅 しかも、それが毎時間の学習の目的として意識されていることが大切なのですね。少しすっきりしました。

毎時間の読みに、意欲的な言語活動を

— 数日後 —
中堅 浮かぬ顔をしているね。何か悩んでいるの？

新採 ええっ、二か月。それじゃあ二期が終わっちゃいますよ。保護者から進捗について言われているものもあるし、そんなに時間をかけるのは無理です。

主任 指導書では十四時間扱い。二週間程度の想定ね。学習の手引きには、**①**詳しく読む、**②**感じたことや考えたことを話し合うという学習活動が示されています。「書く」のコーナーもありますね。まずは十四時間で指導計画を立ててみましょうか。

新採 単元名は「読んで考えたことを話し合う」か。話し合えばいいのなら、手引きの**②**から始めたらいかがでしょうか。そうすれば早く終わりますけれど……。

主任 しっかり読んで内容をつかんでからでないと、話し合いにならないでしょう。だから、**①**が大事。単元名の下のリード文にも、「登場人物の行動や気持ちの変化をとらえ」とあるわ(※1)。……それにしても、指導事項を考えると、「人

新採 物語全体を読み込んで、最後に話し合うという指導計画を立てたものの、私のクラスの実態から考えると、長期間、子どもたちの学習意欲を持続させるのは難しそうですね。毎時間、意欲をもつて、詳しく読めるような工夫を考えたいのですが、思いつかなくて……。

中堅 実は、私もそう。つい、教師主導で引つ張ってしまう。よく読める子は楽しそうなんですけど、全員を夢中にさせる、あるいはすべて全員参加したという実感もてる活動を工夫したいんだけど。

主任 毎時間の言語活動を、継続的に入れることには賛成。単元のねらいを達成し、なおかつ作品の特徴を生かした活動を組み込むことが大切だと思う。ちよつと確認しましょうか。単元で身につかせたい「読む」ことと「能力」はなんだった？

新採 指導事項ウだから……物語の構成を、場所や時間の変化という視点から読み取ること。中心人物(主人公)の「ごん」と、それに対する人物としての「兵十」の設定を読み取ること。物語の展開に応じて変化していく二人の気持ちを読み取ること。「情景」については……。

1 読んで考えたことを話し合おう

登場人物の行動や気持ちの変化をとらえ、感じたことや考えたことを話し合おう。

読む

※1：単元名とリード文(4年下P4)

物の気持ちの変化を考える」や「場面の様子を想像する」のようになりそうなものなのに、なぜこういう単元名なのかしら。

中堅 私も不思議に思ったのですが、これは、言語活動と関係があるんじゃないでしょうか。主任がおっしゃる通りに話し合うためには、読まなければならぬ。つまり、この単元名は、詳しく読むことの必然性、子どもが学習へ主体的に取り組むための活動の見通しを示している。

新採 そうか！「場面ごと」に詳しく読むのは、読後の話し合いのため」という単元全体を通した読みの目的をはっきりさせているんですね。

中堅 学習指導要領の第3学年及び第4学年「読むこと」の言語活動例ア「物語や詩を読み、感想を述べ合うこと」を受けているんだと思う。

新採 「読むこと」の指導事項ウには「場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読むこと」とありますね。

中堅 文学的な文章では、情景をもとに心情を想像することができません。心が重いときは何を見てもどんよりしているけれど、うきうきしているときは全てがバラ色に見えるというの、よくあること。例えば、「1」の場面。雨が降り続いていて、空はからつと晴れていて、もずの声がキンキンひびいているときとでは、「ごん」の気持ちのありようが違って感じられない？

新採 そうか。情景から心情を想像し、作者が意図したその場面のトーンを感じることができるのか。すると、叙述を詳しく読み込むことが必要ですね。

主任 そうね。その前提で、どんな言語活動が毎時間の読みを深めるのか考えてみましょう。子どもと同じ場に立つて考えるという意味でも、まずは本文を音読したり視写したりしてみない？

教材の特徴に応じた言語活動の設定

主任 ……何度読んでも深いわねえ。子どもたちに気づかせたい言葉や表現が

います。

中堅 私は、子どもにヒントをもらいました。「変化」は、折れ線グラフで表せるというもの。ちょうど算数で、変化の様子を折れ線グラフに表したり、変化の特徴を読み取ったりする学習をしていたのです。「ごん」と「兵十」の心情を二つの数量と捉え、場面ごとのグラフを作ってつなげていくというのはどうでしょう。

主任 すごい。それは「心情曲線」と呼ばれる手法よ。基線を何にするか、心情変化の起点を示す叙述をどう読み取るかなど、初めて経験させる場合は、しっかりモデルを示してから始めると、主体的な学習が期待できると思いますよ。

新採 私は、学習の手引きの「書く」コーナー（※3）を参考にして、毎時間、「ごん日記」を書かせたいと思います。この作品は、「1」の場面から「ごん」と「兵十」の関わりが出てくるので、いたずらをした「ごん」、反省する「ごん」、償いをする「ごん」、月のいい晩の「ごん」、引き合わないなあと思う「ごん」というように、場面ごとに「ごん」の気持ちを想像

いっぱい。でも、ここが我慢のしどころ。教師の読みを押し付けるのではなく、子ども一人一人が「自分の読み」をもち、それを交流することで、考えを広げたり深めたりする。この流れを、授業の展開にしっかりと位置づけたいですね。

新採 発見があります。子どもの立場になって学習の手引きに取り組んでみたときの気づきです。「言葉」コーナーにある「思う」と「考える」の使い分けの課題（※2）について考えてみたら、「ごん」が「考える」ところは、「2」の場面の「こんなことを考えながら」と「あなたの中で考えました」の二か所だけなんです。あとは全て「思う」でした。

中堅 二か所目には、特に注目したほうがよさそう。「ごん」が「…にちがいない。…にちがいない。」と推理を巡らせ、自分のせいで「兵十のおつかあ」が死んだのだと判断するところ。思いついたらすぐ行動に移す、単純で短絡的な「ごん」が自省する場面。物語の方向性を決める重要な部分ですね。

新採 そう、ここから「ごん」の償いが始まる……大きな心情の変化です。

して、その日の日記を書き続けます。「6」の場面では、「ごん」への手紙を書く、「兵十」や「加助」の会話を想像するなど、やつと結び付いた二人の気持ちに気づかせられるようにして、その後の話し合いに臨ませたいと考えています。

主任 学習の手引きを、毎時間の活動にうまく盛り込んだわね。書くことは、思考を整理したりまとめたり、筋道をつけたりするのに有効ですからね。想像するときの手がかりを文章中の言葉・表現に求めることを、しっかり指導することでですね。「どの言葉から、あなたはそう考えたの」と、考えたことの根拠を明確に

言葉
▼「ごんぎつね」の中で、場面の様子がよく分かる、目にかぶったと思う表現をノートに書き写しましょう。
・空はからつと晴れていて、もずの声がキンキンひびいていました。
・人々が通ったあとには、ひがん花がふみ折られていました。
▼「ごんぎつね」には、「思う」と「考える」という、よく似た言葉が出てきます。どのように使い分けられているかを考えましょう。

※2：「言葉」コーナー（4年下P25）

主任 なるほど。ここの扱いを大事にしたいわね。この作品の読みだけにとどまらない、広く汎用できる「読みの能力・言語の力」。国語科で大事にしたいポイントですね。では、「単元を貫く言語活動」である「読んで考えたことを話し合う」ための毎時間の活動はどうしましょう。学習の手引きには、人物の行動と気持ちを場面ごとに書き出した表があるけれど、二人のクラスでは、子どもたちの意欲が持続しないという話だったわね。私も、これだけでは「ごん」と「兵十」の関係が分かりにくいかもしれないと思

して交流させることを大切にね。

新採 そうか。国語科では子どもどんな発言も認めるものと思いがちですが、叙述から根拠を引き出させることで、きちんと評価すればいいのですね。ところで、主任はどんな活動を考えたのですか。

主任 最後が話し合いなので、毎時間、「話すこと・聞くこと」を取り入れようかと。毎時間、子どもが「登場人物のだけか」と「きき手」の役割になって進める、インタビューを構想中です。場合によっては、二人組やグループでの交流にも活用できるかもしれない。いずれにしても、クラスの実態と指導のねらい、教材の特徴を考えて、活動を決定しなくてはね。二人のアイデア、参考にしたいわ。

学年会での具体的なやり取りの中に、教材研究のときに大切にしたい視点を盛り込んでみました。教材を使って確かな読みの力を身につけさせるには、教材研究のためのこうした話し合いの時間がとても大切です。ぜひ、参考にしてくださいね。

書く

▼どちらかを選んで、取り組みましょう。
・「6」の後で、「兵十」が「ごん」のことを「加助」に話すとしたら、どのような会話になるでしょうか。二人の会話を想像して、書きましょう。
・「ごん」になったつもりで、「1」から「5」の場面ごとに日記を書きましよう。出来事だけでなく、思ったことや考えたことも想像して書きましよう。

※3：「書く」コーナー（4年下P24）

12

漢字学習に生きる書写指導

新しい指導を考える会

「漢字学習」と「書写の学習」は、どちらも文字に関する学習です。しかし、子どもたちの意識の中で、これらはどの程度結び付いているのでしょうか。多くの場合、それぞれが全く別の学習として認識されているのではないかと思います。もし、これらを有機的に関連づけることができれば、より効果的に子どもたちの文字意識を高めることができるはずです。そのために、どのような意識で書写指導を行うとよいか考えてみましょう。

はじめに

「教材文字をつくりの作品を完成させる」——それがゴールの書写学習は少なくありません。もちろんそれだけでも子どもたちはその時間、文字をじっくりと見つめ、丁寧に美しく文字を書こうという意識をもつわけですから価値はあります。しかしこの場合、ねらいはあくまでも「作品作り」ということになってし

まうため、漢字学習、つまり日常に生きて働く力を育てるのは難しくなります。書写で学んだことを漢字学習に生かすには、まず、毎時間の書写の授業の終わりに、子どもたち自身が「今日はこれを学んだ」ということをしっかりと理解できている必要があります。つまり、教材文字をつくりを書くことを目的とした学習展開ではなく、「文字の原理・原則」を学んだうえで書いて確かめる学習を展開する必要があるということなのです。

ることで、応用でき、日常に生きて働く力を育むことが可能になります。

では、「文字の原理・原則」を学ぶ書写とはどのようなものなのでしょうか。五年「文字の組み立て方（かまえ）」の実践を通して考えてみたいと思います。

2 導入

「子どものつまずきや？」を大切に

学習のスタートは、子どもたちの学習意欲に火をつけることから始まります。「分かりたい」「できるようになりたい」という気持ちは、「文字の原理・原則」に迫るうえで欠かすことができません。そこで、いくつかの工夫が必要なのです。

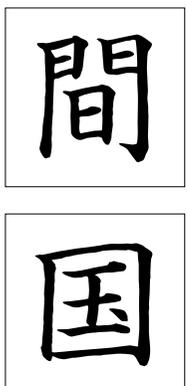
■身につけさせたい力の明確化

子どもたちは、全体的な完成度の高まりを書き文字に求める傾向にあります。教師もまた、欲張ってしまい、つい多くの学習要素を詰め込んでしまいがちです。しかし、このような意識で授業を行っていくと、結局その一時間でどんな力が身についたのかがぼやけてしまい、分からなくなります。まずは、子どもたちに身につけさせたい力はなんなのかを明確にする必要があります。それが直接、評価にもつながっていきます。

■課題文字の吟味

「かまえ」のある文字の組み立て方は「かまえ（外側）」の中に「内側の部分」

が「収まるように書く」ことを学びます。「かまえ」は、「内側の部分」が収まりやすいよう、そのスペースを意識しながら書き、「内側の部分」は、「かまえ」の中に収まるよう小さめに書く必要があります。「かまえ」には、「もんがまえ」や「くがまえ」など、いくつか種類がありますが、どの文字を課題にするかによって、学習効果が変わります。「あれ？ うまく収まらない！」という、子どもの「困り感」が大きいほど学ぶ必要性が高まるのです。では、次のうち、より学習効果が高いのは、どちらの文字でしょうか。



実際に試したところ、子どもたちの「困り感」が大きく、学習効果が表れたのは、「国」のほうでした。「国」は、最後の一点で「かまえ」を閉じて「玉」の部分を中心に収めなくてはならないからです。毛筆文字の場合、多くの子は、最後の一点が「玉」の部分とぶつかってしまい、うまく閉じることができません。そこで、「なんとかしなくては！」と、「収

まるように書く」ことに目を向け始めるのです。

一方、「間」は、下方が空いているため、たとえ「日」の部分が多少「もんがまえ」からはみ出しているとしても、子どもたちの問題意識にはつながりにくいといえます。そのため、子どもたちは「収まるように書く」といういけばん大切なポイントとは違った部分に目を向けてしまうのです。

このように、よりシンプルに目標に迫るためには、子どもの思考に沿った課題文字を選択することが重要です。

■試書

試書のしかたによってもまた、子どもたちの「困り感」は変わります。「国」のような、簡単に誰もが迷わず書けるような文字の場合、教科書の教材文字を見ずに自力で書いてみるという方法もあります。「簡単な文字のはずなのにうまく書けない」という現実が、「なんとかしたい」という思いを生むのです。

逆に、教材文字を見てもなお、「うまく書けない」「ポイントとなる部分に気づきにくい」という文字もあります。そういう場合は、あえて教材文字を見ながらの試書を取り入れるのも効果的です。

3 分かる

次に、どんなところにつまずいたのかを全体で交流し、「閉じられない」「ぶつかった」などの問題に焦点化していきました。そして、『かまえ』の中にうまく収めるにはどうしたらよいかという共通の課題を設定します。子どもたちは、課題に沿って、試書でうまくいかなかった原因を分析します。その際、基準となるのが教材文字です。教材文字と自分の試書を比較し、気がついたことを教材文字に書き込ませます。

気づいたことを出し合わせると、子どもたちはまず最初に「内側の部分の『玉』のために『かまえ』の中の余白を広くとる」ことに目を向けました。具体的には、「縦画を長く」「縦画を真つすく」「縦画の右側を長く」などです。このように、内側の部分をうまく収めるための方法を発見し、「できそう」という見通しをもつていきます。

その後、早速、分かったことを生かして書く練習をします。その際、「自分は、縦画が内側に傾いて下の方が狭くなっていたから、縦画を真つすく書くことを目標にしよう」というように、自分の課題

を明確にすることが大切です。ネームプレートなどを用いて、板書に位置づけるのも効果的です。

練習を進めていくと、「かまえ」の中の空間を広くとっているにもかかわらず、最後の一面が閉じられない、「玉」の下側の空間が狭くなるなど、新たな課題を見つかる子が出てきました。中側の部分を大きく書きすぎるのが原因です。

そこで、その子の課題を全体で共有しました。すると、子どもたちの目は、「かまえ（外側）」から「玉（内側）」に向かい始めました。「かまえ」だけではなく、内側の部分も意識して書くことが大切であることに気づきます。このようにして、ようやく子どもたちは「収まるように書く」ことにたどり着くのです。

4 分かる↓できる

「収まるように書く」ことに気がつくことで、子どもたちの書く文字は、徐々に「玉」がしっかりと収まった「国」に近づいていきました。

しかし、それでもなお、うまく書けずに悩む子が多くいました。頭では分かつ

けると、より効果的です。

このように、評価や掲示に至るまで、ただ上手に書けたというだけではなく、「かまえ」のある文字の組み立てでは「収まるように書く」ことが大切」という意識がとぎれないよう工夫することが大切です。それにより、子どもたち自身、「身につけた力」がなんなのかをしっかりと理解することができるからです。

7 「身につけた力」を使う

「国」という文字を通して、「かまえ」のある文字の組み立て方を学んだ後は、この「原理・原則」を他の文字に応用させます。

これまで習ってきた漢字を中心に、まずは「くにがまえ」をもつ漢字を洗い出します。そして、「収まるように書く」ことや「最後の一面を書く前の空間」などを意識し、硬筆で書いてみます。また、同時に「くにがまえ」以外に「もんがまえ」など、身近な「かまえ」のある漢字にも発展させていきます。そうすることで、日頃使っている多くの文字に、今回

ているのにできないのです。ここで、「分かる」を「できる」につなげる関わりが必要になってきます。そのためには、具体的なイメージを示すことが大切です。

写真のように、「国」を、最後の一面を残して「玉」まで書いた段階で提示するのです。これにより、下の部分にこんなにも広い空間が必要なのだということに気づかせることができます。子どもたちからは「えっ！ そんなに？」という驚きの声が上がりました。これで、一気に「分かる」が「できる」に変わります。



▲「国」の最後の一面を取り除いたもの。

5 評価

最後に、この一時間の変容を自己評価させます。評価すべき点は、「内側の部分の『玉』がしっかりと『くにがまえ』の中に収まっているか」ということです。

学んだ「原理・原則」が生かせることを実感できます。

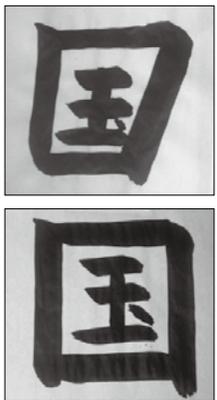
さらに、それらを画用紙などにまとめて掲示しておけば、新出漢字の学習を行う際、関連する「原理・原則」を振り返りながらバランスよく美しい文字を書く意識を高めることができます。書写の学習が日常に生きる大切な学習であることを実感できるように。

8 まとめ

「つまずく↓分かる↓できる↓実感・自信」、これが、学びの実感を生む授業の仕組みです。

子どもたちが、必要感をもって学ぶことができるよう、思考の流れに沿って学習を組み立てることで、「文字を見る目」、つまり、文字意識を育てることが可能になります。

このように、書写の時間が子どもたちにとって、「文字の原理・原則」を一つ一つ獲得する時間になっていくことは、日々の漢字学習や日常生活に生きて働く力を育むことにつながるものと考えます。



▲上が試書で下がまとうと意を、組み立てようとして書けるようになっている。

6 掲示

掲示方法を工夫することで、子どもたちの意欲を高めることも可能です。大抵は、まとめ書き一枚を掲示するものですが、この「ビフォー・アフター」（試書とまとめ書き）を並べて掲示し、その変化を価値づけます。その際、「縦画が真つすくになって、『玉』の入る場所ができたね」「縦画を長くすることで、『玉』の下に空間ができたね」というように、この学習の目標に合った評価コメントを付

光村図書ホームページを、ぜひご覧ください

<http://www.mitsumura-tosho.co.jp>

毎日の指導に役立つさまざまな資料が、弊社ホームページ「光村チャンネル」に掲載されています。

シーズン・インタビュー

さまざまな分野で活躍されている方をゲストに迎え、3回にわたってお話をうかがう人気のコーナーです。教科書に掲載されている作者や筆者の方にも多くご登場いただき、作品に込める思いや、子どもたちに伝えたいことなどをお聞きしています。

いせひでこ
伊勢英子 (画家・絵本作家)

「海の命」(6年)

私にとっての「海の命」は、上に向かっての光と、音と、泡の形。だから、あのとき私はきっと、それを見つめている「太一」の顔を描いたんだと思います。(2012年夏 第1回より抜粋)



もとかわたつ お
本川達雄 (生物学者)

「生き物は円柱形」(5年)

つまり、私のやっている生物学は「意味を問う」「なぜに答える」ということなのです。そしてそれならば、小学生だってわかることなんです。(2010年秋 第1回より抜粋)

まつたに こ
松谷みよ子 (作家)

「ばけくらべ」(3年上)「茂吉のねこ」(4年上)「雪女」(5年)

民話の採訪を通じていちばん強く感じたことは、民話ってこんなに人生を反映して深いものかっていうことです。(2010年夏 第2回より抜粋)



たかの すすむ
高野進 (陸上短距離指導者)

「動いて、考えて、また動く」(4年上)

自分なりの工夫は、「まず動く」ことなしにはありえません。まず、自分から積極的に動いてほしい。(2010年春 第2回より抜粋)



教科の部屋

教科書の表紙をクリックすると、各教科のページへアクセスできます。年間指導計画や教科書訂正のお知らせなどがご覧いただけます。

光村コミュニティ

会員専用のページです。指導案、「国語教育相談室」のバックナンバーなどがご覧いただけます。

光村メールマガジン

月2回発行しているメールマガジンです。ご登録・バックナンバーはこちらから。

教科書クロニクル

光村図書が発行してきた国語教科書を一挙ご紹介。

国語教育相談室

最新号をこちらからPDFファイルでご覧いただけます。

赤木かんの読書Q&A

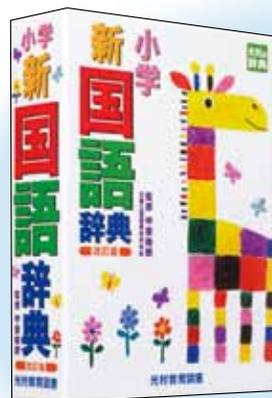
読書に関するさまざまな疑問に、赤木かの子さんがお答えする、人気コーナー。

光村の辞典

新学習指導要領・改定常用漢字表に対応

教科書の言葉を多数収録しています。

改訂版 小学新国語辞典



教科書では辞典の学習を4月に行います。新学期を新しい辞典とスタートしませんか。

ご用意はお早めに

学習時期 3年生4月

3年上 24ページ 「国語辞典のつかい方」

学習時期 4年生4月

4年上 24ページ 「漢字辞典の使い方」



改訂版 小学新漢字辞典

◆ B6判 1,312ページ 別冊付録「国語辞典の使い方」「学年別学習漢字表」

学校納入定価 1,800円

◆ B6判 1,312ページ 別冊付録「漢字辞典の使い方」

学校納入定価 1,800円

新出漢字を1字ずつ丁寧に学習

漢字の学習 漢字 **かんぺきくん**



- 基礎を固め、テストで習得度を高める。
- 新出漢字の筆順を全分解で表示。

◆ 1年:年刊 2~6年:上下刊 A4縮小判 40~72ページ 4色刷り 別冊テストつき

学校納入定価 各380円

別冊テストつき

3ステップの反復学習で確実に定着

光村の漢字ステップドリル



- 児童が飽きずに何度も練習できる。
- 自学自習にも最適。

◆ 1年:上下刊 2~6年:学期刊・上下刊 B5拡大判 32~80ページ 4色刷り 別冊テストつき 漢字シールつき

学校納入定価 1年(上下刊) 2~6年(学期刊) 各340円 2~6年(上下刊) 各510円

別冊テスト漢字シールつき

ご採用を希望される場合は、御校ご担当の弊社商品取り扱い店にお問い合わせください。

光村教育図書

〒141-0031 東京都品川区西五反田 2-27-4
TEL 03-3779-0581 FAX 03-3779-0266
http://www.mitsumura-kyouiku.co.jp/

あの名作をもう一度

『光村ライブラリー』と教科書クロニクル

「小学校のときに習ったあの作品が忘れられません。タイトルを教えてください」「今、自分の子どもに読んでもらいたくて、教科書で読んだあの作品を探しています」などなど、過去の『国語』教科書に掲載されていた作品や文章についてのお問い合わせをいただくことがよくあります。子ども時代に教科書で出会い、そのときにはよく分からなくても、大きくなってから何かの折にふっと思い出してもらえる。それは、私たち教科書を作る者にとって幸せな出来事です。

●名作のアンソロジー

光村図書発行の『光村ライブラリー』(全18巻)では、過去の教科書掲載作品のうち、先生方や子どもたちに高い評価をいただいたものを精選し、アンソロジー形式で収録しています。「赤い実はじけた」(第15巻)、「田中正造」(第16巻)など、教科書で出会ったなつかしいあの作品にもう一度めぐり会うことができます。

➡光村ライブラリー(全18巻/各巻定価1,050円)

昭和46年度版から平成12年度版までに、小学校『国語』教科書に掲載された作品の中から118点を収録。



●記憶をたどるクロニクル

光村図書ホームページ内「教科書クロニクル」のコーナーでは、過去の教科書に掲載された作品を年代ごとに一覧することができます。あの頃、自分が携えていた教科書にはどんな作品が載っていたのか、記憶をたどってみませんか。作品とともに、なつかしい思い出がよみがえってくるかもしれません。

➡教科書クロニクル

http://www.mitsumura-tosho.co.jp/chronicle/syogaku

